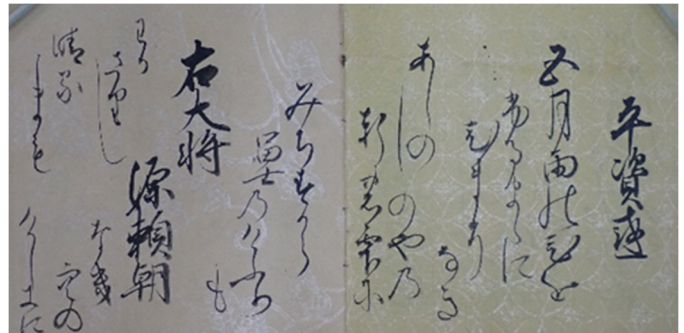


×横 8.9cm。外題、表紙左肩の布目地金紙題簽（縦 5.2cm×横 1.5cm）に「三十六人歌仙」、「武門哥仙」、「中古謠仙」、「新哥仙」、「女哥仙」と墨書（本文同筆か）。ただし、「武門哥仙」のみ、表紙と題簽（縦 5.6cm×横 1.5cm）、および題字が他と異なる。見返し、布目地金紙。料紙、唐紙。毎半葉に和歌 1 首と作者名を散らし書きする。字高、約 6.7cm。

右に掲出したのは「武門哥仙」のうちの源頼朝の歌。

右大将頼朝／みちすがら／富士のけぶり／も／わか／ざり／し／晴る／るまも／なき／空の／けしきに

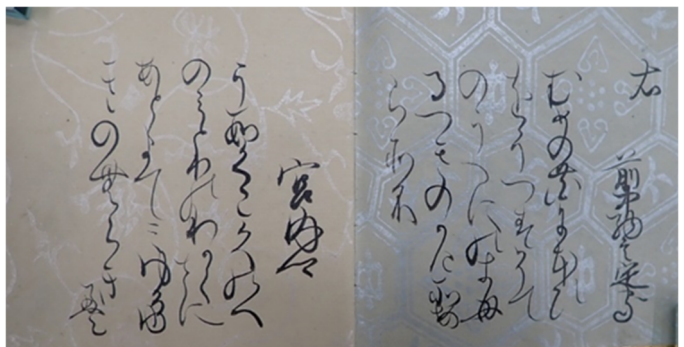
『新古今集』（羈旅・975・三句「わかざりき」）に見え、「道中、富士山の噴煙も見分けられないよ、晴れ間もない空の様子では」の意。鎌倉將軍では三代実朝が歌人として有名であるが、初代頼朝も勅撰歌人であった。



その下は「中古歌仙」の藤原定家と宮内卿の歌。それぞれ有名な新古今歌人。

右 前中納言定家／むめの花にほひ／をうつすので／のうへのきも／るつきのかげぞあ／らそふ

宮内卿／うすくこくのべ／のみどりのわか／くさに／あとまのみゆるゆ／きのむらぎえ



「B、女房三十六人歌仙」と同じように、公任の『三十六人撰』に触発される形で、後世には女流歌人のみ、武家歌人のみ、近い時代の歌人のみなど、さまざまなバリエーションの三十六人撰が作られた。

J、〔歌仙絵〕（断簡）1軸 登録番号：1379302

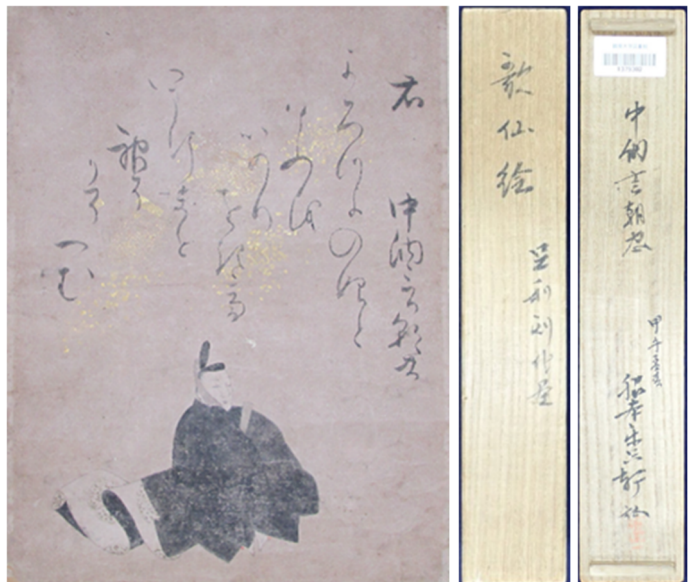
軸装。箱入。〔室町後期〕写。縦 24.0 cm×横 17.5cm。卷子本の断簡。箱書、蓋の表に「歌仙絵 足利□□□」、裏に「中納言朝忠 〈甲午孟春〉 脇本楽只軒 〔印〕（判読不能）」。東京芸大教授などを歴任した美術史家の脇本楽之軒（1883～1963）か。

掲出の藤原朝忠は 10 世紀に活躍した歌人（910～967）。父の定方も歌人で、ともに『百人一首』に和歌が撰ばれる。

右 中納言朝忠／よろづよの始と／けふを／いのり／をきて／いま行末を／神ぞ／かぞへむ

この歌は公任『三十六人撰』（68）にも採られるが、五句「神ぞ知るらん」とする本が多く、『拾遺抄』（賀・164）や『拾遺集』（賀・263）も同じ。一方、後掲の「L、定家卿眞蹟帖」や『朝忠集』（I・53・二句「はじめとけふは」／II・13）は「神ぞかぞへむ」とする。村上天皇皇女の楽子内親王が伊勢斎宮として下向するときの歌で、「万代も続く村上天皇の御代の始まりだと今日を祈りおき、その行く末は（伊勢神宮の）神が数えるだろう」の意。

鎌倉時代には似絵が流行し、歌仙の姿を描いた「歌仙絵」も増えていく。



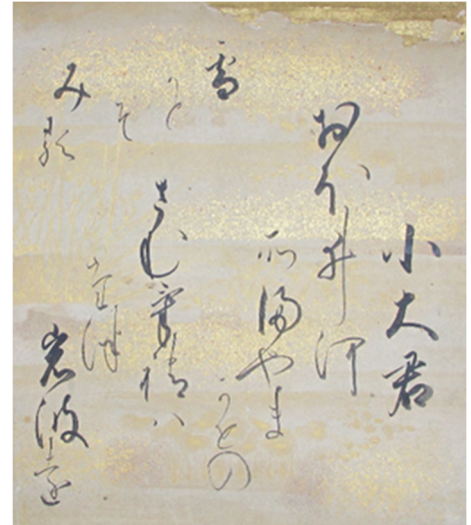
K、三十六歌仙 和歌（断簡）1幅 登録番号：2150094

軸装。箱入。伝堯然親王筆。金泥霞引下絵色紙。縦 21.2 cm×横 18.1cm。極札、「妙法院宮堯然親王 おほみ河〔守村〕」（古筆別家の五代了仲か）。堯然親王は後陽成天皇の第六皇子（1602～1661）。

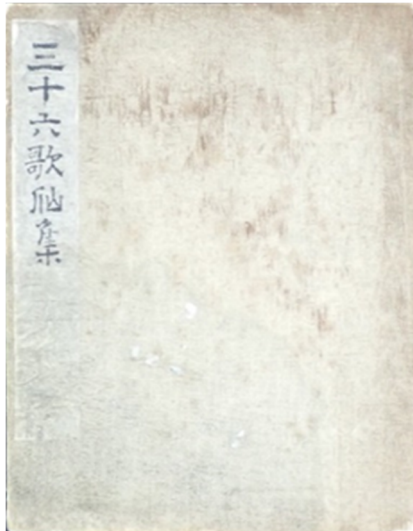
小大君／おほみ河／そまやま／かぜの／さむければ／たつ／岩波を／雪／かと／ぞ／みる

大堰川へ杣山（材木用の木を植えた山）から吹き下ろす風が冷たいので、岩に立つ白波を雪かと思ふことだ、の意。

この歌は第4句に異同があり、『小大君集』（I・82／II・145）や『新拾遺集』（冬・669）は「岩うつ波を」とする。そもそも、公任撰『三十六人撰』には採られていない。しかし、『俊成三十六人歌合』（93）や『女房三十六人歌合』（57）などに見え、第4句も「たつ岩波を」となっている。



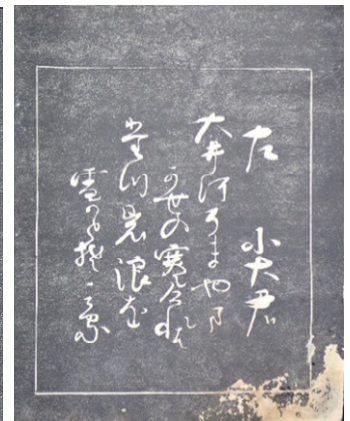
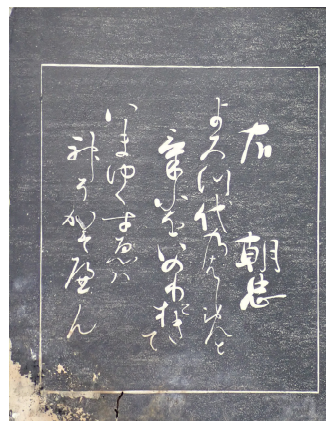
L、定家卿真蹟帖 1帖 登録番号：1400787



折帖仕立。文政5年（1822）序刊。左版。後補表紙、縦 18.1cm×横 14.1cm。表紙左肩の白題簽（縦 14.1cm×横 2.2cm）に「三十六歌仙集」。和歌を囲む白枠は縦 14.0cm×横 12.0cm。序によると、小堀権十郎が藤原定家筆本を模写し、それを志賀理齋が「珍藏」していたのを、理齋男の原放齋（後に徳齋・得齋）が模刻したもの。小堀権十郎は江戸前期の茶人（1625～1694）。父遠州とともに定家様を得意とした。原得齋は幕府に仕えた江戸後期の儒者（1800～1870）。

藤原定家は『新古今集』などの撰者として著名な歌人であるが、後世にはその書も「定家様」として珍重された。なお、定家は『百人一首』の原型と見られる『百人秀歌』を編むが、これも『三十六人撰』と同じく秀歌撰のひとつである。

定家真蹟か精査を要するが、和歌の本文はJやKと一致する。



IV 新収資料

M、一葉抄 1軸 (夕顔卷) 登録番号、1421931

卷子装 (冊子改装)。〔安土桃山時代〕写。伝細川幽齋筆。紙高 23.6cm。字高、約 21.7cm。料紙、楮紙。柿衛文庫旧蔵。折紙 (元禄 4 年 (1691) 古筆了仲)、極札 (古筆了仲か)、極札 (古筆了泉) あり。なお、僚卷と見られる藤袴巻が専修大学図書館蜂須賀文庫に、真木柱巻が早稲田大学図書館に所蔵される。

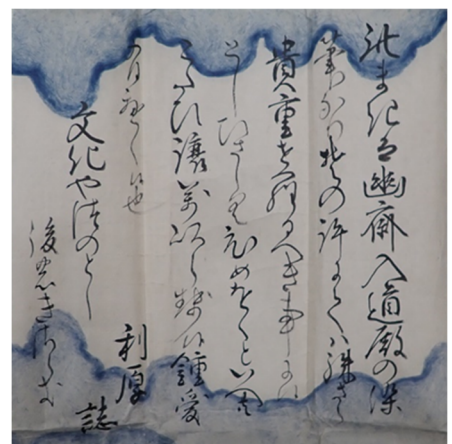
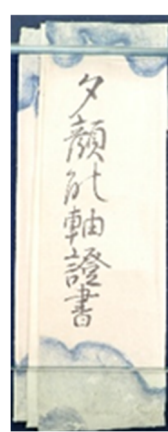
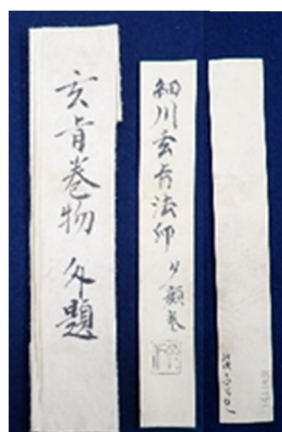
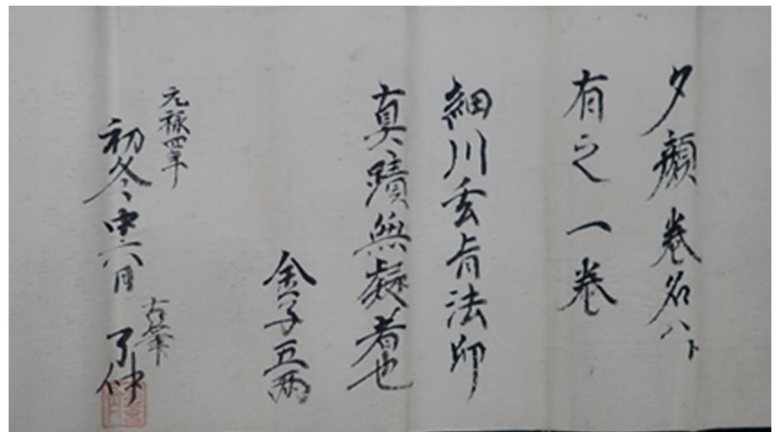
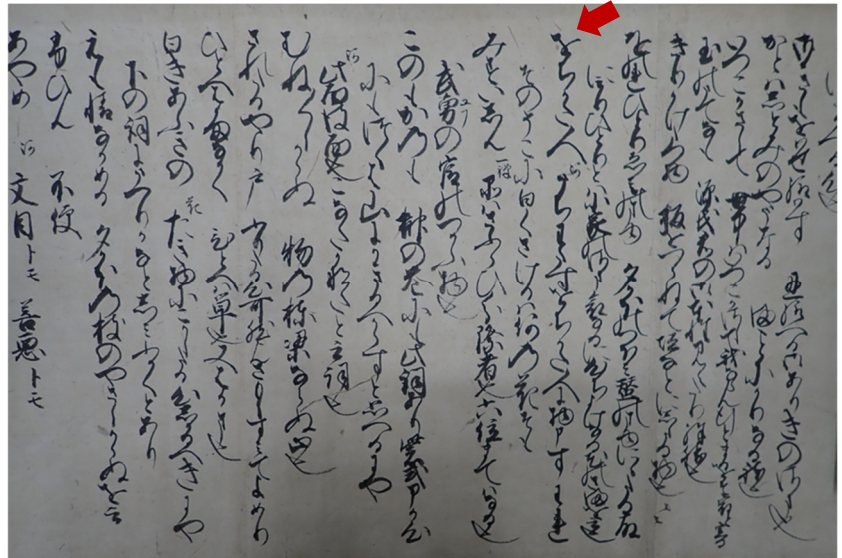
『一葉抄』は『源氏物語』の古注釈書のひとつで、明応 3 年 (1494) に藤原 (池田) 正存が連歌師宗祇 (1421~1502) などの説を整理したものと、牡丹花肖柏 (1443~1527) の跋文に記される。細川幽齋 (1534~1610) 筆とされるが、幽齋の真筆と比較しても妥当と思われる。『一葉抄』を著した正存は細川家の家人であり、幽齋筆本の資料的価値は極めて高い。

掲出したのは夕顔巻冒頭の注 (矢印)。

をちかた人〈河〉うちわたすを
ちかた人に物申すわれ／その
そこに白くさけるは何の花ぞ
も

光源氏が白い花を見て「をちかた人に物申す」(向こうの人へ申し上げる)とつぶやくと、御隨身が引歌に気付き「かの白くさけるをなむ、夕顔と申しはべる」と答える場面。その引歌は『河海抄』という先行の注釈書に「うちわたす～」と説明されていることを述べる。

これは『古今集』に見える旋頭歌で「向こうの人へ申し上げる私、そこに白く咲いているのは何の花なのか」の意。



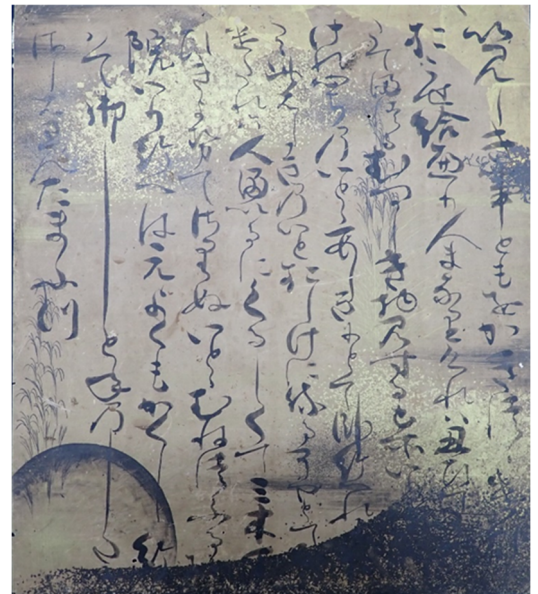
N、源氏物語絵 1葉 (夕顔巻) 登録番号、1421111

〔江戸前期〕写。縦 22.8cm×横 18.3cm。料紙、斐紙か。光源氏が夕顔の花を所望する冒頭の場面 (「M、一葉抄」で掲出した部分)。

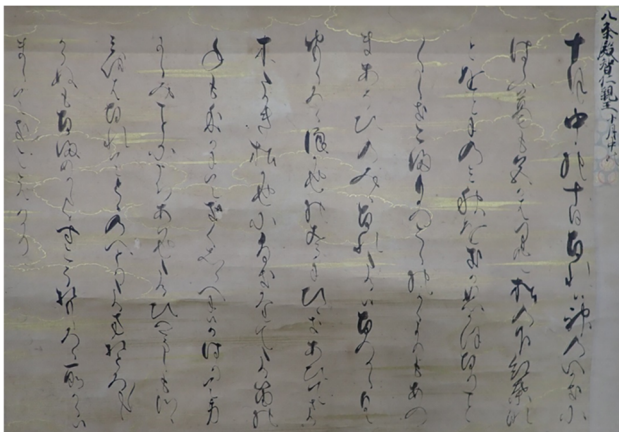


O、源氏物語色紙 1葉 (若菜下巻) 登録番号、1421110

伝本阿弥光悦筆。〔江戸前期〕写。縦 23.1cm×横 20.3cm。料紙、金銀箔散らし金銀泥下絵斐紙。10行。字高、約 20.5cm。『源氏物語大成』1193 ページ 12 行目「いみしきこといもを」～1194 ページ 3 行目「さしはさみ給つ」に該当。ただし、1193 ページ 12 行目「たいにあからさまにわたり給へる程に」ナシ。『源氏物語大成』によると、この部分を欠く伝本はない。青表紙本系統。裏に「光悦書色紙」「わかな下」などと墨書。



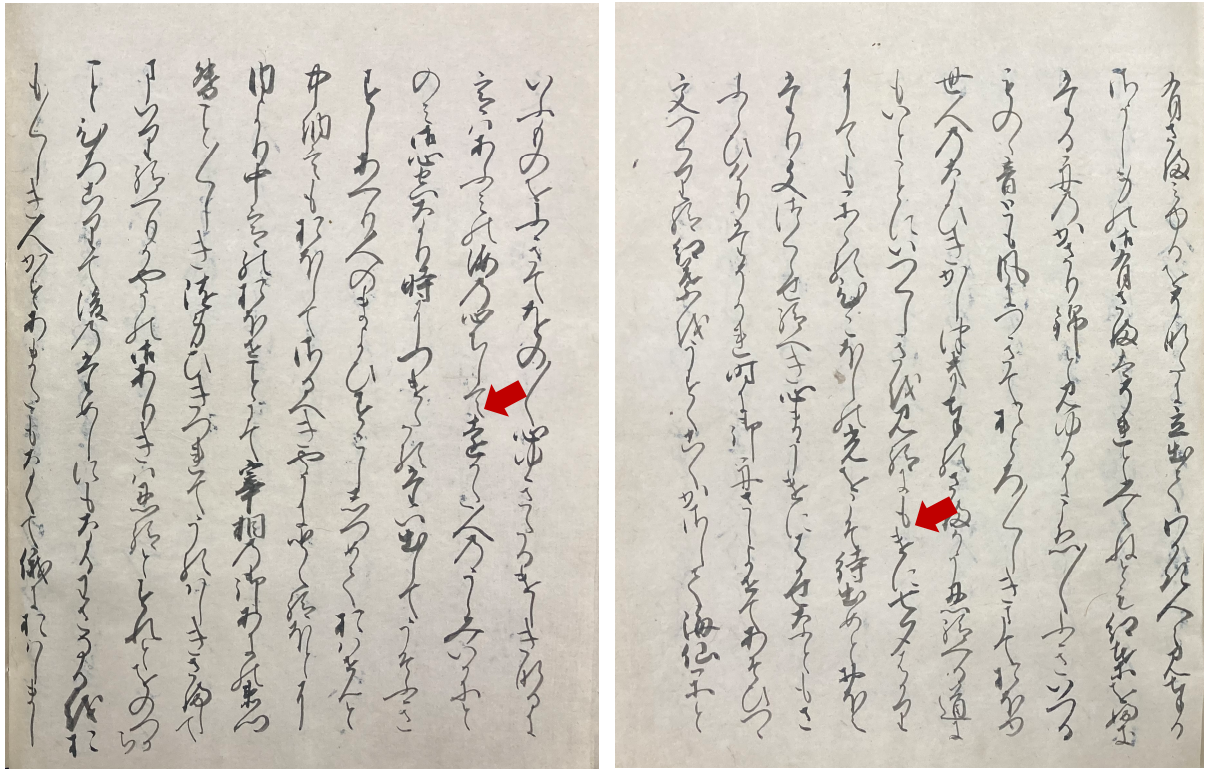
P、源氏物語絵巻 1幅 (若菜下巻) 登録番号、1421928



軸装。桐箱入。金霞引金泥下絵料紙。詞書、伝智仁親王筆。縦 29.8cm×横 39.8cm。字高、約 27.0cm。
『源氏物語大成』1137 ページ 13 行目「十月中の十日」～1138 ページ 5 行目「ましてきこえけり」に該当。青表紙本系統。大きな異同なし。極札（畠山牛庵）あり。画、伝土佐光起筆。縦 29.4cm×横 50.7cm。
近代の箱書には「大原御幸」とあるが、若菜下巻の住吉詣の場面。

なお、斎宮歴史博物館蔵「源氏物語絵巻」1 軸（帚木巻など 6 巻分の断簡）は僚巻と見られる。

Q、源氏物語 1 帖（総角巻） 登録番号：1421929



綴葉装。伝下河辺長流筆。〔江戸前期〕写。縦 22.1cm×横 17.3cm。料紙、間合紙。見返しも同じ。每半葉 10 行。字高、約 19.4cm。墨付 84 丁。奥書、「長流（花押）記之」。柿衛文庫旧蔵。

掲出した場面は匂宮たちが紅葉狩する様子を、その恋人である宇治の中君らが見物する場面。

げに七夕ばかりにても、かかるひこぼしの光をこそ待出めとおぼえたり。

女房たちは匂宮の威勢を見て、彦星のように年 1 回しか会えなくてもよいから、恋人として待ってみたいと思う。

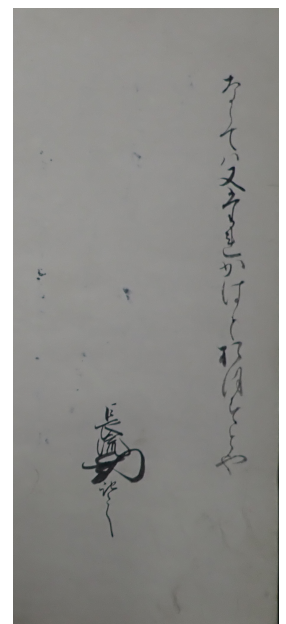
一方、匂宮は大勢のお供に囲まれ、中君のもとへなかなか行けず、
遠かた人のうらみいかに

と心を悩ませる。これは「(宇治川の) 向こうの人の恨みはどれほどか」と中君の心情を思いやったもの。『源氏物語』の室町時代の注釈書『花鳥余情』は

七夕の天の戸わたる今宵さへをちかた人のつれなかるらむ

を引歌として指摘する。これは『後撰集』(秋上・238・よみ人しらず)に見え、彦星と織姫でさえ会える七夕の夜なのに、なぜあなたは冷淡なのかといった意。これが引歌ならば、中君も同じように私を恨んでいるだろうと匂宮が想像したことになり、直前の部分で女房たちが匂宮を彦星に喩えていたこととも響き合う。

なお、この歌は三十六歌仙の藤原敦忠や「J、〔歌仙絵〕(断簡)」に挙げた藤原朝忠の家集にも見える。



凡 例

1. 書名は原則として『国書総目録』に拠り、未記載のものは鶴見大学整理書名を記した。
2. 原則として袋綴の板本である場合は書型を記し、それ以外の場合は装訂を記した。
3. [] は推定記載に付した。
4. 『源氏物語』の巻名は通行の表記に統一した。例)「もみぢの賀」→「紅葉賀」
5. 漢字は通行の字体に統一した。
6. 本展示における時代区分は以下の通りとした。
江戸初期…慶長～寛永[1643]、江戸前期…正保～元禄[1703]、
江戸中期…宝永～天明[1788]、江戸後期…寛政～天保[1843]、江戸末期…弘化～慶応
7. 解題執筆や出展書目を選出する際には、本学で開催された以下の展示図録を参照した。
 - ・『芸林拾葉 鶴見大学図書館新築記念貴重書図録』(1986 年)
 - ・『大学院文学研究科開設記念 鶴見大学図書館蔵貴重書展目録』(1989 年)
 - ・『古典籍と古筆切 鶴見大学蔵貴重書展解説図録』(1994 年)
 - ・『学校法人総持学園創立 80 周年記念 和歌と物語 鶴見大学図書館蔵貴重書 80 選』(2004 年)

展示担当者

たぐち	のぶゆき	(日本文学科准教授) * 統括
かとう	ゆみえ	(ドキュメンテーション学科教授) * 編集
かわた	しょうこ	(日本文学専攻博士後期課程) * 協力者

ポスターデザイン

いぐら	ふみと	(ドキュメンテーション学科教授)
-----	-----	------------------

第 155 回貴重書展
鶴見大学図書館・源氏物語研究所

歌仙と物語

— 共鳴する和歌と源氏物語の世界 —

発行日 令和 4 年[2022]2 月 14 日 第 1 版

編集・発行 鶴見大学源氏物語研究所

〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見 2 丁目 1-3